上顎左側臼歯部硬口蓋に発生した巨大な周辺性骨腫の1例

中出 修・吉川 泰子・八重樫和秀・大内 知之
 阿部 英二・菅野 秀俊・賀来 亨・奥山 富三
 村井 茂*・成川 芳明*・堀越 達郎**

A case of large peripheral osteoma occurred in the hard palate of the left maxillary molar region

Osamu NAKADE・Yasuko KICHIKAWA・Kazuhide YAEGASHI・Tomoyuki OHUCHI
 Hideji ABE・Hidetoshi KANNO・Tohru KAKU・Tomizo OKUYAMA
 Shigeru MURAI*・Yoshiaki NARIKAWA*・Tatsuro HORIKOSHI**

Abstract: A 41-year-old woman was referred by her dentist because of a tumor mass in the left maxilla which interfered with swallowing and speech. She first noticed a small and painless mass about 20 years ago.

Macroscopic examination showed a pedunculated tumor mass, the size of hen's egg, attached to the hard palate of the left maxillary molar region.

The radiographic examination revealed a densely radiopaque rim surrounding a central region showing a slightly ground glass-like pattern.

Histologically, the specimen consisted of a rim of compact bone enclosing a central area of cancellous bone. The marrow spaces contained the fatty or fibrous tissue.

The diagnosis was cancellous osteoma.

Key words: benign bone tumor, peripheral osteoma, cancellous osteoma

緒 言

骨腫は成熟骨の増殖を特徴とする良性腫瘍で、顔面頭蓋骨はその好発部位とされている。

今回われわれは上顎左側臼歯部硬口蓋に有茎性に発育した鶏卵大の周辺性骨腫の1例を経験したので報告する。

症 例

東日本学園大学歯学部口腔病理学教室
 (主任: 奥山富三教授)

* 函館市立病院歯科
 (主任: 村井 茂)

** 元東日本学園大学歯学部口腔外科学教室
 (現主任: 金沢正昭教授)

Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Higashi Nippon Gakuen University.
 (Chief: Prof. Tomizo Okuyama)

* Department of Dentistry, Hakodate Municipal Hospital (Chief: Dr. Shigeru Murai)

** Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Higashi Nippon Gakuen University (Chief: Prof. Masaaki Kanazawa)

受付日: 昭和62年1月9日

患 者: 41歳 女性。

初 診: 昭和60年5月 日。

主 訴: 口蓋腫瘍。

家族歴: 特記すべき事項なし。

既往歴: 特記すべき事項なし。

現病歴: 約20年前、上顎左側臼歯部口蓋側歯肉に硬い小腫瘍があることに気づくも、そのまま放置していた。その後、腫瘍は徐々に増大し、嚥下および発音に多少困難をきたしたので昭和60年5月 日、口蓋腫瘍を主訴とし、某歯科を受診し、立病院歯科を紹介された。

現 症

全身所見: 体格中等度、栄養状態は良好で、身体各部

写真 1 口腔内所見

写真 2 パントモX線所見
矢印は上顎左側臼歯部の腫瘤を示す。 写真 3 トモグラフィ・X線所見
写真2と同じく、矢印は上顎左側臼歯部の腫瘤を示す。

写真 4 CT 所見

の骨格、その他異常所見は認められなかった。

顔貌所見 顔貌はほぼ左右対称。顎下リンパ節は左右ともに小指頭大、可動性で腫瘍は認められなかった。

口腔内所見：15～8部の口蓋側から上顎結節にかけ、約5×3cmの限局性で、口腔内に有茎性に発育した骨様硬の腫瘍が認められた(写真1)。表面粘膜は平滑、多少蒼白で、びらん、潰瘍は認められなかった。腫瘍に接した17は頬側に転位、挺出していたが、156にこのような転位、挺出は認められなかった。開口障害は認められなかったが、ごく軽度の嚥下および構音障害が認められた。

血液・生化学検査 異常所見なし。

X線所見：パントモX線写真では臨床所見に一致し、上顎左側大臼歯部に基底部を有し、口腔内に突出した鶏卵大の境界明瞭な不透過像が認められた(写真2)。トモグラフィ・X線写真でもほぼ同様の所見が認められた(写真3)。

CT 所見：左側硬口蓋から軟口蓋にかけて、辺縁は骨様の石灰化像を示し、内部は low-density の構造をもつ腫瘍が認められた(写真4)。

臨床診断：上顎骨周辺性骨腫。

処置および経過：昭和60年8月■日、GOF 全身麻酔下に167 抜去後、エアサージョームおよび骨ノミにて腫瘍基底部より切断摘除した。口腔内と上顎洞が交通し

写真 5 摘出物所見

写真 6 摘出物軟X線所見

写真 7 摘出物断面所見
海綿骨様の構造を示している。 写真 8 病理組織所見 (脱灰, H-E, $\times 2$) 写真 9 病理組織所見 (脱灰, H-E, $\times 45$, 写真 8 の一部拡大)

腫瘍最表層は緻密な骨質よりなる層で被われ、内部は細い骨梁が無数かつ不規則に形成されており、骨梁間には脂肪組織あるいは疎性結合組織が存在している。

結合組織が存在していた (写真 8, 9)。

病理組織診断：海綿状骨腫。

考 察

骨腫は内骨膜あるいは外骨膜より発生し、成熟骨の増殖を特徴とする良性腫瘍で、その発生部位から、内骨膜性に顎骨の内部に発生する中心性骨腫と外骨膜性に顎骨の表面に発生する周辺性骨腫および軟組織に発生する傍骨性骨腫に分けられる。また病理組織学的には緻密な層板骨質の増殖から成る緻密骨腫と骨質が比較的少なく海綿質様の構造をもつ海綿状骨腫に分けられる¹⁻³⁾。自験例は上顎左側臼歯部硬口蓋に発生した周辺性骨腫で、有茎性に発育し、大きさ約 $5 \times 3 \times 3$ cm と巨大であった。また、病理組織学的には海綿状骨腫であった。

われわれが文献を渉猟した範囲では、本邦において報告された上顎骨骨腫は表 1 のようであり、少数例ではあるが自験例を含めて検討を加えた⁶⁻¹⁵⁾。

大きさでは 14 例中、明らかなものは 11 例でそのうち最

たため、手術部にアクロマイシン軟膏を塗布したガーゼを填塞した。術後経過良好で、1 か月後に上顎洞交通部に栓塞子のついた局部床義歯を装着した。術後約 1 年の現在、再発は認められず、嚥下および構音障害も改善した。

摘出物所見：摘出腫瘍は大きさ約 $5 \times 3 \times 3$ cm であり (写真 5)、その軟 X 線写真では表面は一層の強い不透過帯が認められ、内部はスリガラス様の不透過像を呈していた (写真 6)。摘出物断面は黄白色を呈し、海綿骨様の構造を示していた (写真 7)。

病理組織学的所見：腫瘍最表層は緻密な骨質よりなる層で被われ、その内部は比較的細い骨梁が無数かつ不規則に形成されており、骨梁間には脂肪組織あるいは疎性

表 1 上顎骨骨腫の本邦の報告例 (空欄は不明を示す)

	報告者	年齢	性	期間	大きさ (cm)	部位	臨床分類	病変組織 分 類	その他
1	後 藤(1951)	19	♀	約 3 年	(鳩卵大)	臼歯部頰側	周辺性	海綿状	
2	後 藤(1951)	42	♀	約10年	(胡桃大)	臼歯部頰側	周辺性	緻 密	
3	加藤ら(1959)	17	♀			臼歯部頰側	周辺性	緻 密	
4	加藤ら(1959)	42	♀	約 3 年		臼歯部頰側	周辺性	緻 密	
5	加藤ら(1959)	10	♀	約 1 年		前歯～臼歯部頰側	周辺性		
6	河村ら(1962)	21	♀	約 6 年	5×3×1.5	硬口蓋	周辺性	海綿状	
7	中村ら(1970)				(小鶏卵大)	上顎洞			
8	広瀬ら(1975)	18	♀	数年	3.2×2.8×2.6 (頰側) 1.8×1.9×2.3 (上顎結節)	臼歯部頰側 上顎結節	周辺性	海綿状	※
9	小山ら(1982)	39	♀		(拇指頭大)	犬歯窩	中心性		
10	竹 松(1982)	48	♂	15～16年	1.0×2.0×2.5 1.0×1.5×0.5	臼歯部頰側 (臼歯部頰側)	周辺性	緻 密	※
11	本間ら(1982)	56	♂	約 2 年	2×2×2.5	上顎洞		海綿状	
12	牧角ら(1982)	6	♂		2.2×1.8	硬口蓋	周辺性	緻 密	
13	正木ら(1983)	33	♀		(拇指頭大)	上顎洞	傍骨性	海綿状	
14	自験例(1986)	41	♀	約20年	5×3×3	硬口蓋	周辺性	海綿状	

(※ 同一口腔内 2 個)

小のものは $1.0 \times 1.5 \times 0.5 \text{ cm}^{12)}$ で、最大のものは約 $5 \times 3 \times 3 \text{ cm}$ (自験例)で、自験例は上顎骨骨腫としては、かなり大きいものの範疇に属するものと思われた (表 1)。

部位別ではこれら14例中16個の腫瘍が認められ、臼歯部頰側 8、上顎洞 3、硬口蓋 3、犬歯窩 1、上顎結節 1 であった (表 1)。石川、秋吉⁸⁾は上顎骨骨腫では犬歯窩部、硬口蓋、洞部に多いと報告しているが、これら14例について見れば、臼歯部頰側が最も多く、次に上顎洞、硬口蓋が多く、犬歯窩には少ない結果となった。

症状を自覚してから来院までの期間については明らかなのは 9 例で、最短のものは約 1 年⁷⁾、最長のものは約 20 年 (自験例)、平均約 7 年であった (表 1)。

臨床的分類では明らかなもの 12 例中、周辺性骨腫 10 例、中心性骨腫 1 例、傍骨性骨腫 1 例であった (表 1)。一般に文献的には周辺性骨腫が中心性骨腫より多いといわれ、傍骨性骨腫はまれだといわれている^{3,9)}。

病理組織学的分類では明らかなもの 11 例中緻密骨腫 5 例、海綿状骨腫 6 例で、ほぼ同数であった。

性別では明らかなもの 13 例のうち、女性が 10 例、男性が 3 例で、女性に多い傾向にあった (表 1)。従来報告されている骨腫の性差は、中村ら¹⁰⁾によれば女性に多い

といわれ、河村ら⁸⁾はその差は明らかでないとして述べている。

年齢別では明らかなものは 13 例で、9 歳以下 1 例、10～19 歳 4 例、20～29 歳 1 例、30～39 歳 2 例、40～49 歳 4 例、50 歳以上 1 例で、あらゆる年代に及んでいた (表 1)。好発年齢について、Gorlin and Goldman¹¹⁾はあらゆる年齢に発生するが、40 歳以上に多いと報告し、石川、秋吉⁸⁾はおもに 10～35 歳代の人に多いと、また河村ら⁸⁾は 20～40 歳に多いが、その発生年齢は、骨発育の旺盛な思春期に多いだろうと推測している。

本邦における巨大な有茎性骨腫には、自験例の他に上顎では河村ら⁸⁾、下顎では久野ら (2 例)¹⁷⁾、田録ら¹⁸⁾の報告があるが、いずれも海綿状骨腫であり、巨大な有茎性骨腫には海綿状骨腫が多いことが示唆された。

骨腫の定義に関して現在までさまざまな議論がなされてきたが、あくまで骨腫は成熟骨の増殖を特徴とする良性腫瘍であり、外来刺激あるいは炎症による反応性骨過形成や炎症組織の化生によって生じた病的骨形成あるいは他の腫瘍組織の二次的化骨とは区別されるべきであるが、多くの著者は顎骨の骨腫においては必ずしもその鑑別は容易でないと述べている。Shafer⁴⁾は顎骨は感染にさらされる機会が多いので、刺激あるいは炎症によって

形成される骨瘤と真の腫瘍性のものとの鑑別は常に可能とは限らないといっている。石川、秋吉³⁾は骨腫の病理組織学的所見について、増殖した骨組織の構造は正常の骨組織に近いものから不完全なものまでいろいろであるとして述べ、真の骨腫か否かを病理組織学的所見によってのみ判断するのは必ずしも可能でないことを示唆している。Gorlin and Goldman¹⁾は骨腫という記載が独立した病変として使われているか疑問だとし、完全に骨化した骨軟骨腫、外傷による外骨症、炎症組織の骨化したもの、線維性骨異形成症の高度に骨化したものなどにおいても骨腫として用いられてきたとしている。

自験例に関しては患者が自覚してから来院するまでの期間が約20年と経過が長く、その間徐々に増大し、大きさが約5×3×3cmと巨大であったこと、病理組織学的にも炎症あるいは軟骨組織が認められなかったこと、また上顎骨および口蓋骨は膜内骨化により生じ、骨軟骨腫の発生部位としてはきわめてまれな部位であることから、骨腫と診断すべきであろうと思われる。

しかし、ごくまれに上顎においても骨軟骨腫の報告²⁰⁾があること、また軟骨内骨化においても海綿骨を生ずるので、完全に骨化した骨軟骨腫の可能性も否定はできない。

自験例の脂肪髄様の組織発生についても興味深いところである。Thoma¹⁹⁾の海綿状骨腫の1症例では、大部分は脂肪髄様で、ごく一部に赤色髄を有するものがあるが、自験例においては赤色髄を有していないので、発生初期に造血能を有していたか否かは明らかでない。

骨腫の処置は比較的簡単な術式で摘除され、再発はまれとされている。自験例においても術後約1年4か月の現在、再発は認められていないが、骨腫は発育が緩慢であるから、長期間の経過観察が必要と思われる。

結 語

41歳、女性の上顎左側臼歯部硬口蓋に発生した巨大な周辺性骨腫の1例を経験したので、その概要を報告するとともに若干の文献的考察を行った。

なお、本論文の要旨は、第40回日本口腔科学会総会(昭和61年5月)において発表した。

引用文献

- 1) Kragh, L.V.: Bone tumors of the jaws. In Gorlin, R.J., H.M. (ed): THOMA'S Oral Pathology. 6th Ed, vol. 1. Mosby, St. Louis, 1970, p 560-562.
- 2) Huvos, A.G.: BONE TUMORS. Diagnosis, Treatment and Prognosis. 1th Ed. W.B. Saunders. Philadelphia, 1979, p 1-6.
- 3) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学Ⅱ. 改訂版, 永末書店, 京都, 1982, p 553-557.
- 4) Shafer, W.G. and Hine, M.K.: A Textbook of Oral Pathology. 4th Ed. W.B. Saunders, Philadelphia, 1983, p 163-164.
- 5) Lucas, R.B.: Pathology of Tumors of the Oral Tissues. 4th Ed. Churchill Livingstone, 1984, p 191-195.
- 6) 後藤吉男: 上顎に発生した骨腫の2例. お茶の水学会誌 3: 93-96 1951.
- 7) 加藤邦義, 北村久弥: 骨腫の3例. 口外誌 5: 322-325 1959.
- 8) 河村正昭, 赤坂庸子, 他: 口蓋の有茎性骨腫の1例. 口外誌, 8: 153-155 1962.
- 9) 中村平蔵, 新国俊彦, 他: 顎顔面領域に生じた骨腫の4例について. 口科誌 17: 346-347 1968.
- 10) 広瀬洋二, 服部千秋, 他: 上顎に発生した周辺性骨腫の1例. 日口外誌 21: 221-224 1975.
- 11) 小山茂樹, 長島駿一郎, 他: 中心性骨腫の1例. 日口外誌 28: 2139 1982.
- 12) 竹松啓一: 左上顎骨に発生した周辺性骨腫の1例. 交通医学, 36: 287-289 1982.
- 13) 本間義章, 岡野昌治, 他: 上顎洞内骨腫の1例. 日口外誌 28: 2147 1982.
- 14) 牧角淳朗, 大田逸雄, 他: 口蓋に発生した骨腫の1例. 日口外誌 28: 1374 1982.
- 15) 正木日立, 矢島安朝, 他: 上顎洞に発生した骨腫の1例. 日口外誌 29: 1857 1983.
- 16) 中村保夫, 渡辺文麿, 他: 下顎舌側に発生した骨腫の1例. 日口外誌 14: 134-136 1968.
- 17) 久野吉男, 古屋英毅, 他: 下顎骨舌側に発生した大きな骨腫の2症例について. 日口外誌 17: 48-51 1971.
- 18) 田縁 昭, 上田 忠, 他: 下顎舌側に発生した骨腫の1例. 日口外誌 21: 62-65 1975.
- 19) Thoma, K.T.: Oral Surgery. 5th Ed, vol. 2 Mosby, St Louis, 1969, p 969-972.
- 20) Brady, F.A., Sapp, J.P., et al.: Extracondylar osteochondromas of the jaws. Oral Surg, 46: 658 1978.